「はじめまして、澤村美海です。よろしくお願いします」
　何年生か訊くと、すかさず「三年です」と答えた弘章を、隣で美海が睨んでいた。
「仲がいいんだね」
「いやいや、こいつは調子がええだけやから」と、美海が答える。
「二人は現地、初めてなの？」
　あ、と二人が同時に声をあげると、二人はやっぱり目線を合わせ、ばつが悪そうに弘章は口を噤んだ。一瞬間があいて、美海が続ける。
「中学生の時にいっぺん来たけど、詳しいことはあんま覚えとらんのです。酷かったいう記憶はあるけど。ほんで、もういっぺん行ってみようか言うて」
「言うたんは俺やで！」
　割って入ってきた弘章を、美海の視線が刺すのが、車の前方を見ていても伝わってきて、渚は少し笑った。どうやらつきあってるような特別な関係ではなさそうだと思った。
「あそこ、今どうなっとんやろいう話になって、せやから俺が行てみようういうて言うたんや」
　運転しながら石川も少し笑っていた。
「そんな高校生がおるいうのは嬉しいことですよ。なんせ、五〇年近く前からの話やから。この子らの生まれるずっと前に起きたことやからね」
　白い軽自動車は、午前中に渚が自転車で通った道と同じ道を、豪快なエンジン音を立てて進んでいく。
「それでもどうにかして語り継いでいかんといかん、て思うんやけど、人間ていう生き物は何というか……」
　石川の言葉の真意をはかりかねながら渚は言葉を継いだ。
「喉元過ぎればっていうことですか？」
「まあ、そういうところかな。詳しいことは現地見てもろて、それから資料館でお話ししますよ」

　鉄柵の錆びたフェンスは、渚が午前に見たように閉じられてはいなかった。開かれたフェンスを、白い軽自動車が砂埃をあげ走り抜ける。初めて見る景色が開ける。大きな建屋はいったい何のためのものか。プレハブ小屋も見える。

少し登った坂道で車は止まった。
「降りて見ますか」
石川の言葉に頷き、渚は助手席のドアを開けて出た。
音はない。晴れやかな青空に瀬戸内の長閑な水面が広がる。遠くに大型船が浮かぶ。その手前に不釣り合いな、広大な「造成地」が広がる。しかしそれは「造成地」ではない。そのように見えるだけで、実際は、廃棄物を取り除いただけの、極めて人工的な土地だ。豊かな自然に囲まれているからこそ、不釣り合いに映る。
美海と弘章も降りてくる。
「ここですか」と尋ねる渚に、石川が答える。
「そうです。ここから九〇万トンを超える産業廃棄物が、隣の直島に運び出されました」
「それじゃあ直島が酷いことになるんじゃないですか」
「そうではありません。直島に無害化処理される施設が作られて、再利用されました」
「すべてですか？」
「すべてです。それが条件でしたから」
石川の言葉に、一歩も譲らないといった覚悟が滲む。

香川・豊島事件――豊島産業廃棄物不法投棄事件
戦後日本で起こった最悪の産業廃棄物不法投棄事件。一九七〇年代、車で一周しても三十分もかからないような瀬戸内の小さな島の一角に、産業廃棄物の不法投棄が始まる。事業許可を出した県と計画段階から反対していた島の住民がもめにもめ、一九八〇年代に深刻化。一九九〇年には兵庫県警が大規模な摘発に入る。一九九三年に島のほとんどの世帯が公害調停を申請し、七年をかけて二〇〇〇年に成立。ようやく解決への道を歩み始める。二〇〇三年から廃棄物を隣の直島に運び出し、それを終えたのが二〇一七年。搬出するだけで十五年かかった総重量は、九一万トン余。現在は地下水の浄化処理や原状回復をどうするかが課題となっている。
ここまでのことは予備知識として入れておいた。当時社会を揺るがす一大事件として取りあげられていたことも、何となくは理解していた。ネットには動画もアップされていたので、どれくらい酷い状況だったのかも、頭では理解していた。

渚がこの事件に注目したのは、それが日本の循環型社会への転換点だと感じたからだった。国連が提唱する、ＳＤＧｓ「持続可能な開発目標」と直結するのではないか。豊島事件はＳＤＧｓと別個の問題ではなく、有機的に結びついて再評価され、そこで得た知見を生かし、これからの社会のあり様を補完することになるのではないかと感じたからだ。

大量生産と大量消費。そんな社会が良い状態だとは思えない。自然に還元できない化学物質の身勝手な廃棄。それにより引き起こされる海洋汚染、自然破壊。人間社会が必要以上に排出する二酸化炭素。それによる地球温暖化。温暖化が引き起こしているであろう高温、豪雨、豪雪、干ばつ、自然火災、異常気象。この現象が良い状態だとは到底思えない。にもかかわらず、人間による無秩序な経済活動は今なお突き進んでいる。どうにかして止めなければと思うものの、自分一人の力ではどうしようもないとも思う。にしても、何もしなければ着実に社会経済は破綻する。そして、人類も滅びる。国連が提唱し、国家間レベルで大きく変化しない限りどうしようもない。どうしようもないと思いつつも、個人レベルでできること、個人レベルでもしなければならないことがあるはず。そう思い至り、行き着いたのが、豊島だった。

「ここは、元は事業者の事務所だったのを買い取って資料館にしたんです」

事務所と言うけれど、それはプレハブ小屋だった。中に入ると、学校の文化祭で展示されているような模造紙や写真が、すべての部屋の壁一面にびっしりと貼りつめられ、展示されていた。なかには産業廃棄物の標本やはちまきなどもあり、資料館といえば資料館だ。

「うわー、懐かしいな」と言う弘章に、「ここ、ここ。中学んときに来たよな」と美海が応える。

石川の話は、この事件の発端となる土砂採取、事業計画、許可申請、そして一九七六年の高共丸の迷走に始まり、様々なエピソードへと及んだ。

一九七七年のことです。当時の知事がこう言いました。

「人間が活動すればゴミは出る。出たゴミはどこかで処分しなければならない。法があるわけだから、法に従って処理をすれば、豊島の住民が恐れるような環境破壊や健康被害は起こらない。それでも反対するというのであれば、それは事業者へのいじめ

であり、住民エゴである。豊島は海は青く空気はきれいだが、住民の心は灰色だ」
　指導監督を怠ったうえに加害事業者を擁護するかのような発言に、住民は激怒しました。香川県を離れて岡山県に移るという離県決議が出たほどです。
　一九九一年に加害事業者が逮捕され、県としての責任が問い糾されたときには、「気に入らなかったら、知事を訴えたらどうですか」と、住民を罵倒する有様でした。
　それでも一九九三年には公害紛争処理法に基づき、公害調停申し立てを、島のほぼすべてに当たる五四九世帯主が申請人となって申請しました。

　ここで石川は、まるで楽しかった、懐かしい思い出話でもするかのように表情を緩ませ、語りはじめた。

　翌年から公害調停が始まるのですが、第二回公害調停のときの弁護団長と調停委員長のやりとりは、まるで子どもの喧嘩でした。調停委員が、「県の調査結果を検証し、必要があれば追加調査を」と言ったのに対し、弁護団長は、「調停は不調にしていただきたい」と返したのです。
　「調停委員会に頼った私たちが間違っていた。不調にしていただきたい。しかし、ただでは済まさない。下には報道関係者が待っている。いかに公害調整委員会が役に立たないかを言いつけてやる」と言い出したのです。これに対して調停委員長は、「横暴だ！」と叫びます。すると今度は、「横暴とは何だ！」と怒鳴り返します。怒鳴り合いは繰り返され、一時休停になりました。
　もともと問題視されていた県の調査結果を前提にすること自体、公正性に欠けるとの判断で弁護団長が言ったわけです。

　大人の喧嘩にもいろいろある。感情にまかせただけの無秩序な喧嘩もあるが、秩序を守らんがため、互いの正義を全身全霊を賭けてぶつけ合う喧嘩もある。
　勝つためにはあらゆる智力を総動員しなければならない。感情をほとばしらせながらも、大局を冷静に見つめる判断力が求められる。また冷静に対応しながらも、打つべき杭を譲ることがあってはならない。
　しかし本当に大切にすべきは、物事の真理を貫く、紛れもない人としてのあり様である。無欲で、まっすぐで、地を這いつくばるかのような行いに勝るものはない。